

# 『パスカル博士』、作品創造についての物語

## ルーゴン=マッカール家系樹の完成

寺嶋 美雪

### はじめに

1893年6月の『パスカル博士』の刊行を以って、エミール・ゾラは20年以上に渡って心血を注いだ『ルーゴン=マッカール叢書』全20巻を、ようやく完結させた。この小説の巻頭には、「母の記憶と愛する妻に、私の全作品の要約であり結論となるこの小説を捧げる<sup>1</sup>」という献辞が添えられた。ゾラは、1871年の第1巻『ルーゴン家の運命』、第7巻『居酒屋』（1877）、そして第8巻『愛の一ページ』（1878）において、一般の読者に向けて叢書の企図を説明する序文を書いたことはあったが、いかなる叢書の作品も特定の相手に捧げることがはなかった。したがって、1880年に亡くなった母エミリーと精練の妻アレクサンドリーヌに宛てたこの献辞は、長年のたゆみない執筆の苦労を偲ばせる、短くも万感の想いをこめた特別なメッセージであることが推し量られる。しかし『パスカル博士』には、もうひとつの秘められた献辞が存在する。6月20日に、ゾラは26歳の愛人ジャンヌ・ロズロに完成した作品を一冊手渡すが、その一ページ目にはこう記されていた。

私の愛するジャンヌ — その若さゆえの豪華な饗応によって私を30年も若返らせ、ドゥニーズとジャックという贈り物をくれた、私のクロチルドへ。この二人の愛しい子供に宛てて私はこの本を書いたのだ。いつかこれを読んだとき、どんなに私が彼らの母を愛したかということ、そして彼女が大いなる悲しみに沈んでいた私を慰めてくれたことによる幸福を、二人が敬意のこもった情愛によっていずれ返さねばならないことを、子供たちに知ってもらうために<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> Emile Zola, *Le Docteur Pascal, Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterrand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1967, p. 915. 本論での『パスカル博士』の引用は全てこの版を典拠とし、『ルーゴン=マッカール叢書』をRMと略記する。

<sup>2</sup> *Album Zola*, iconographie réunie et commentée par Henri Mitterrand et Jean Vidal, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1963, p. 257.

公に出版された母と妻への献辞よりも、親密な愛情のこもったこのメッセージにおいて、ゾラははっきりと「私のクロチルド」と、『パスカル博士』のヒロインの名でジャンヌに呼びかけ、彼女との子供たちに宛てて小説を書いたと告白している。すべての読者の眼に触れる母と妻へのメッセージと、まったく個人的なジャンヌへの感謝という二つの献辞の存在は、『パスカル博士』と既刊の19作品の明確な違いを象徴している。この物語は、公には叢書の最後を飾る記念碑的作品であるにもかかわらず、ゾラとジャンヌのきわめて私的な思い出の記録でもあるという、二つの特殊な性格を備えている。

ゾラは公の献辞において、「私の全作品の要約であり結論」と『パスカル博士』を定義した。20代の青年作家が抱いた「第二帝政期における一家族の自然的・社会的歴史」という壮大な叢書の構想が、50代の円熟期にあつてなお構造的な一貫性を保ち、主要登場人物全員に何らかの結末を与え得たこと自体、19世紀フランス小説を見渡しても十分に特異な出来事と言えるだろう。特に10巻目の折り返しを迎えて以降は、叢書を継続することの疲労をしきりと周囲に漏らしていたにもかかわらず、ゾラは決して長期の休養や叢書の中断を選ばなかった。だからこそ、30年以上研究に身を捧げた科学者パスカル・ルーゴンは、叢書を締めくくる小説の主人公としていかにもふさわしい。しかし、ジャンヌとの出会いと子供たちの誕生がなければ、『パスカル博士』の内容はまるで違っていただろうと推測させる要素はいくつも物語の内に見出される。本論では、叢書の総括と自伝的小説という二つの軸の上に成り立つ『パスカル博士』の特異性を、物語の鍵となるルーゴン=マッカールの家系樹の存在と、パスカル博士の「書く行為」という問題を通して考察したい。

## 1. 『パスカル博士』、二重の葛藤の記録

『パスカル博士』に存在する二通りの献辞は、作家の私生活上の込み入ったいきさつを反映している。そもそも、第1巻からの再登場人物であるパスカルが、25歳の姪クロチルドと恋愛関係を結ぶことで若々しさと生きる喜びを取り戻すという筋書きには、自伝的要素が色濃い。ルーゴン=マッカール一族を研究し続け、その家系樹を作成するパスカル博士は叢書の執筆者ゾラ自身を、60歳になろうとする伯父の心身を癒す若きクロチルドはジャンヌ・ロズロを、結末で主人公二人の間に誕生する赤子はゾラとジャンヌにもたらされた子供を暗示することは、作家の実生活を知るものにとっては一読すれば明らかなのである。叢書において、遺伝と環境の及ぼす影響について実験

を試みるという当初の自然主義的な意図からは、無視できない逸脱とさえ言える。こうした二重構造には、どのような作家の狙いがあったのだろうか。

ごく簡単に、二つの献辞が書かれるに至った経緯をまとめておきたい。1880年代後半のゾラは、長年に渡る執筆活動に疲労を覚え、神経症による不調を周囲に度々訴えていた。しかし1888年の終わりに48歳のゾラは、妻アレクサンドリーヌが雇っていた21歳の布類整理係の女中、ジャンヌ・ロズロと恋愛関係に陥った<sup>3</sup>。この出会いはゾラを若返らせただけでなく、アレクサンドリーヌとの間には望みながらも授からなかった念願の子供、すなわち1889年9月に長女ドゥニーズ、1891年9月に長男ジャックの誕生をもたらした。この秘密の幸福を保つためにゾラは苦心したが、1892年8月に匿名の手紙によって、愛人と二人の子供の存在は妻の知るところとなった。アレクサンドリーヌの怒りと失望は激しく、離婚の話し合いを含めた家庭の危機がしばらく続いた。だがゾラは、長年の苦勞を共にした妻も、心身の苦惱を癒してくれた若い恋人も失いたくはなかった。かくして、アレクサンドリーヌの最終的な了解を得て、作家としての公の生活は妻と共にし、折を見ては愛人の別宅に通うという二重生活が築かれた。ジャンヌとその子供たちが、疲弊していた作家に再び活力を与え、家族の写真撮影や自転車という新しい趣味に熱中させたことは、ゾラ研究者にとっては周知の伝記的事実である。

1892年の初夏から準備を始め、同年12月7日に執筆にかかり、翌93年5月15日にようやく完成する『パスカル博士』の生成過程は、まだ二重生活が公然と確立される前の、アレクサンドリーヌにジャンヌとの関係が発覚して家庭が最大の試練を迎えた時期と重なっている。当然ながら、作家が私生活を二つの家庭に割り振るといふ不自然さは、3人にとって長引く苦痛の種となった。ゾラは1892年から93年のジャンヌに宛てた書簡の数々で、自由に家族と過ごせない葛藤や、日陰の立場に彼女を置く悔恨などを繰り返し吐露している。したがって、私生活での満ち足りた幸福がそのまま『パスカル博士』における愛の挿話として転写されたと解釈するのは、やや早計である<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 1898年12月11日に、ゾラが亡命先のイギリスからジャンヌに送ったグリーティング・カードのメッセージによって、二人の親密な関係は10年前の1888年12月11日から始まったと推測されている。(Voir la lettre d'Emile Zola à Jeanne Rozerot du 11 décembre 1898, *Lettres à Jeanne Rozerot. 1892-1902*, édition établie, présentée et annotée par Brigitte Emile-Zola et Alain Pagès, Gallimard, 2004, p. 246.)

<sup>4</sup> 『パスカル博士』完成直後のジャンヌへの書簡で、ゾラは次の仕事に取りかかったと語っているが、これはすでに取材旅行も済ませた次の連作『三都市叢書』の第1巻『ルルド』を指す。叢書完結もひとつの通過点に過ぎず、執筆はゾラにとって家庭生活の苦悩から逃れるための、いわば代償行動であり続けた。「少しでも悲しみを

私生活のこうした混乱にもかかわらず、『パスカル博士』を「全作品の要約であり結論」とする準備は、アレクサンドリーヌの傍らで休みなく続けられた。しかしそのためには、ゾラ自身が叢書の起点となる『ルーゴン家の運命』まで記憶を遡る必要があった。『獲物の分け前』(1872)、『ブラッサンの征服』(1874)、『ムーレ神父のあやまち』(1875)、『ウジェーヌ・ルーゴン閣下』(1876)など、最終巻で再登場するルーゴン家の人物が活躍した作品のほとんどは1870年代前半のものであり、ゾラは自分でも詳細があやふやになった既刊の小説を再読せざるを得なかった。その作業がいかにも困難だったかを、1892年8月20日の『エコー・ド・パリ』紙のインタビューで、作家は以下のように語っている。

自分の本を読み返すなどという苦しい作業は、私にはできません。ページをめくる度に必ず、書き直したい行が眼に飛び込んできます。なんて拷問でしょう！だから私のパスカルのことは、まだ殆ど分かりません。なにしろ20年来お眼にかかっていないので、私は記憶を蘇らせようと他の巻で彼が話題になっている箇所を引っ張ってきます。それで彼がひとりの少女、クロチルドを引き取ったことを思い出しました。[...] そう！ たったふたりの主人公を含めてせいぜい5、6人の登場人物だけのごく単純なドラマです。『壊滅』の一大絵巻、騒乱をもたらす巨大な機械を描いた後では、前作とはまるで正反対の、真ましくて素朴な作品を発表するのは、まさに品位あることだと私は思います<sup>5</sup>。

ゾラは第19巻『壊滅』(1892)で普仏戦争の惨禍を扱い、叢書の枠組みに定めた第二帝政期の崩壊を描いた。しかし作家は、過去の作品でも繰り返されてきた、血と炎に彩られた破局によって叢書を締めくくることが良しとせず、『ルーゴン家の運命』の舞台となった南仏の町ブラッサンにいま一度回帰する、平易な小説を計画した<sup>6</sup>。初登場時には4歳で、そのままゾラにも忘れら

---

忘れる唯一の方法として、私は仕事に没頭します。休息など私には無意味です。休めばあなたのことを想い続け、苦しくなるばかりだから。[...] 唯一の望みは破局を避けることですから、死ぬほどの悲しみに沈んでいるのに、陽気に振舞って満たされた男を演じねばなりません。[...] 生活のすべてが毒されてしまいました。」(Lettre de Zola à Jeanne Rozerot du 12 juin 1893, *Ibid.*, pp. 89-90.)

<sup>5</sup> « Le prochain roman d'Emile Zola », *L'Echo de Paris*, le 20 août 1892, repris dans *Entretiens avec Zola*, édition établie par Dorothy Speirs et Dolorès Signori, Ottawa, Les Presses de l'Université d'Ottawa, 1990, p. 96.

<sup>6</sup> エドモン・ド・ゴンクール日記によれば、ゾラは叢書の完結に際して「尻尾に噛み付く蛇の輪」という円環の構図を想定していた。「私はゾラに、ここ数年の仕事量は過剰で恐ろしいほどのだから、休息をとるべきだと言った。『その通り、まさに恐ろしいものです！』と彼は答えた。『ええ、私は過労なのです…。それにこの『パスカル博士』では、私は大量の調査や研究に没頭せざるを得ませんでした。

れ、20年後に見出された1847年生まれのカロチルドは、はからずも物語の1872年の時点でジャンヌと同年になる。この思わぬ一致は、彼女とパスカルの間に起こるドラマの軸を恋愛関係に定めることに寄与したに違いない。

自作の読者となったとたん、第1巻の最初の章から書き直す欲求に駆られるほどに、ゾラは本質的に原稿を修正し続ける作家だった。20巻目の創作においても、ついに叢書を完結させる達成感よりも、長年の苦行から解放される喜びがはるかに勝っているかのようなのである。3ヵ月後の11月26日の『ル・ゴーロワ』紙のインタビューでは、ゾラは膨大な準備作業を終えて取りかかろうとしている執筆を「受難 *le martyre*」と形容し、以下のように語る。

ああ！ 最後のページの下に『了』と書くとき、どんなに嬉しいことでしょう！  
[...]でも実を言うと、自分に満足したことなど決してありません。そもそも、喜びをもって創作したことなど皆無と言ってもいい。[...]それに、私の草稿を本原稿そのものだと思われても困ります。校正刷に大幅な修正を施すこともしばしばなのですから<sup>7</sup>。

この草稿の存在への言及は、最終巻の中心テーマに直接かかわってくる。『パスカル博士』の草稿には、パスカルとカロチルドの物語のみならず、叢書全体を総ざらいするような覚書きが大量に残されており、特に興味深い資料となっている。ゾラは「創作」を指して「出産 *l'enfantement*」という語を当てて産みの苦しみに例え、創作の困難と私生活上の問題という二重の葛藤に苛まれながらも、それらを昇華させる一作のフィクションを「全体の結論」として書くという初めての試みに挑んだ。ジャンヌへの私的な献辞は、本来読者の眼には触れないはずのものであり、夫の死後アレクサンドリーヌが国立図書館に寄贈した膨大な叢書の草稿も、現代の読者だからこそ参照できる資料である。作家が草稿に重きを置かないと明言している以上、作品の生成過程に読解の正答すべてを探するのは確かに誤りだろう。しかし『パスカル博士』では、遺伝学などの説明的要素がちりばめられ、純粋な小説として読むことが困難な半面、パスカルの研究活動の描写を通してゾラ自身がその執筆プロセスをさらけ出し、徹頭徹尾「書くこと」が問題にされている。他のど

---

この『ルーゴン=マッカール叢書』の最終巻に、他の作品との繋がりとを与え、さしずめ尻尾に噛み付く蛇の輪のようにするためです。』(Edmond de Goncourt, *Journal, 1887-1896, texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Fasquelle-Flammarion, t. III, 1989, p. 813.*)

<sup>7</sup> « Le prochain livre de M. Emile Zola », *Le Gaulois*, le 26 novembre 1892, *Entretiens avec Zola*, pp. 105-106.

の作品でも扱われなかった、学者が研究を、作家が執筆をする際に生じる「草稿」それ自体について、多くのことが語られる小説であると言える。

草稿の中で特に注目したいのは、決定版のプラン最初の2ページに記された、「あふれんばかりの自己放棄、善意、快活さ。生への賛歌、健康と未来への希望の叫び<sup>8</sup>」という一文で始まる叢書の結論である。苦難に満ちた創作の経緯とは裏腹に、きわめて肯定的かつ哲学的な要約となっている。

一切が偉大な愛情の内に溶けていく。科学がもたらす平穩、もしくは幸福。言い換えれば生への信頼の回復。不正、不平等。赦し、普遍的な寛容、無限の愛情、熱烈な慈悲。愛他精神、他者の幸福、究極の善意と寛大。生への愛による快活さ。高みから一瞥すると、多くの汚辱とともに、多くの善もある。科学と計り知れない力によるより良い世界への希望。生命とは、大いなる原動力かつ世界の魂である。科学による平穩。すべてを知り、予測し、受入れ、自然を我らに奉仕させ、満ち足りた知性の中で穏やかに生きること<sup>9</sup>。

ここで列挙される、自己放棄や生への信頼、愛他精神の観念は、遺伝病を抱えるルーゴン=マッカールー族にゾラが付与し、これまで描いてきた資質とはかけ離れており、過去の19作を知る読者にはむしろ意外な結論である。ゾラはまた各巻について、「しかるべき場と役割を与える。ごく短い言葉で要約するが、哲学的意味を込めて美しく包む<sup>10</sup>」と書いた。オランダ人記者ジャック・ファン=サンテン=コルフへの書簡では、ゾラは叢書の最終巻を「歴史的、科学的、哲学的に書いている」とし、「3つのいやな副詞を並べましたが、私の意図を的確に表現しています<sup>11</sup>」と説明した。1892年時点でのゾラでなければ書き得ない、この最後の「哲学的」という表現にもまた、叢書計画時の文章とはずれがある。当時のゾラは科学的であろうと努めるあまり、哲学

<sup>8</sup> Plan définitif du *Docteur Pascal*, Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 189.

<sup>9</sup> Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 190.

<sup>10</sup> Le dossier Bodmer, f° 100, cité par Henri Mitterrand, *Le Docteur Pascal*, Gallimard, coll. « Folio Classique », 1993, p. 461.

<sup>11</sup> オランダ、ドイツ、オーストリアへのゾラ紹介に尽力したファン=サンテン=コルフは、1880年から作家と本格的に文通を始めた。しばしば準備中の新作の内容について質問を重ねるこの熱心な外国人読者に対し、ゾラはその都度丁寧な返事を書いたため、執筆状況や作品の企図を明快に説明した書簡が多い。プレイヤッド版のアンリ・ミットランの注によれば、『パスカル博士』の草稿の一部はゾラからファン=サンテン=コルフに贈られ、現在ジュネーヴ近郊コロニーのボドメール図書館に保存されている。(Lettre de Zola à Jacques van Santen Kolff du 25 janvier 1893, *Correspondance*, édition commentée et annotée, sous la direction de Bard H. Bakkar, Montréal, Presses de l'Université de Montréal et Paris, Edition du CNRS, t. VII, 1989, p. 358.)

性の排除を意図していたからだ<sup>12</sup>。ところが最終巻のプランでは、明白な「科学による哲学」への志向が表明され、両者が抜きがたく結びついている。この大胆なほど積極的な発想の転換は、果たしてジャンヌとの出会いという私的な体験だけで説明がつくものだろうか。そして『パスカル博士』本編においては、実際にかくも大らかな叢書の肯定がなされているのだろうか。

## 2. ルーゴン=マッカールの家系樹

全14章で構成される『パスカル博士』の筋書きは、ゾラが「慎ましく素朴な作品」と形容した通り決して入り組んだものではなく、限られた登場人物を軸に家庭内で展開し、多くの章は一日足らずの出来事で完結する<sup>13</sup>。物語は叢書の枠組みである第二帝政期をわずかに超えて、1872年7月を起点として74年8月に閉じる。しかし第1巻『ルーゴン家の運命』を反復するかのようになり、嫡出子側の系統であるルーゴン家の人間が次々に再登場すること、また過去の作品への絶えざる言及により、物語はしばしば20年近い時を遡ることになる<sup>14</sup>。それまでの19作品は、叢書に対する予備知識なしで、単独の小説として読むことが十分可能であった。しかし『パスカル博士』は、これまで叢書に親しんできた読者および書き手であるゾラ自身という、対象となる読み手を半ば限定した小説のように見える。主人公のパスカルが、『ルーゴン家の運命』や『ムーレ神父のあやまち』で脇役としてかかわったことや、姪のクロチルドが『獲物の分け前』と『金』（1891）の主要人物である、並外れた野心家のアリスティッド・サッカールの娘、ひ弱で退廃的な美青年マクシム・ルーゴンの妹であることは、よほど注意深い叢書の愛読者ならばともかく、補足的な説明がなければ大半の読者には分からない。その補足とは、『パスカル博士』のテキストの外側に挿入された一ページ、すなわちルーゴン=

<sup>12</sup> 「哲学者やモラリスト風の書き方をしないこと。人間を単純な力として研究し、彼らの衝突を記述すること。哲人らしさを含まぬ偉大な小説家は存在しないと言うが、それはバルザック風の愚かな哲学だ。私はただ小説家でありたい。」(Ms. N.A.Fr. 10.345, f<sup>o</sup>s 12/13.)

<sup>13</sup> 1892年10月5日のイギリス人翻訳者アーネスト・ヴィゼットリーに宛てた手紙では、ゾラは『パスカル博士』のことを「これは、『愛の一ページ』や『生きる歓び』などの種類に属する私的な小説です」と説明している。(Lettre de Zola à Ernest Vizetelly du 5 octobre 1892, *Correspondance*, t. VII, p. 325.)

<sup>14</sup> ミシェル・グラネは、各章の構造を、叢書全体の時間と空間が複雑にねじれ、交差する14通りの螺旋と捉えている。(Cf. Michel Granet, *Le temps trouvé par Zola dans son roman « Le Docteur Pascal »*, Les publications universitaires, 1980.)

マッカールの家系樹の完成版である。

1868年頃から叢書の本格的な準備を始めたゾラは、バルザックの『人間喜劇』の壮大な小説世界に匹敵し得る、同時代の一大絵巻として計画した。しかし当初10巻を予定していた連作は、「一家族の自然的・社会的歴史」という副題が示す通り、19世紀産業社会のパノラマ的な描写だけでなく、家族のドラマとして全体を連関させることを志向していた。

現代における運動の特徴は、あらゆる野心のぶつかり合い、民主主義の高揚、そして諸階級の登場にある。私の小説は1789年以前には不可能だっただろう。[...] 私は、現代社会に出てゆく一家族の野心と欲望を研究する。彼らは成功に達するものの再び転落し、ついには精神の真の怪物性を生み出すに至る<sup>15</sup>。

『人間喜劇』と比べても遜色のない登場人物と舞台のヴァリエーションを想定しながらも、社会の各層へと散らばるルーゴン=マッカールと名づけられた一族の血脈の物語として、叢書はその一貫性を保つ。したがって、家系樹に連なる人物の相関関係を破綻なくまとめることは、初めからゾラにとってきわめて重要な意味をもっていた。家系樹には、1768年生まれの子孫を病んだひとりの老女アデライド・フークを根幹に、そこから主に二つの系統が分かれ、左側には嫡出子のピエール・ルーゴンを初めとする人物群、右側には庶子のアントワーヌとユルシュールから伸びてゆくマッカール家の面々が描かれている。登場人物たちの秘密を明かして読者の興味を殺がないよう、作家は家系樹の存在を伏せていたが、第7巻『居酒屋』（1877）の成功を受けて翌年の『愛の一ページ』出版時に、構想から10年を経た家系樹を掲載した。

これは単なる図表ではなく、画家フェリックス・レガメによる一本の樹木の絵である。根元のアデライドからは太い枝が左右に分かれ、その葉の一枚一枚に登場人物の生没年・遺伝体質・病歴が書き込まれている。病んだ血がアデライドから子孫へめぐりゆき、婚姻や出産を通して母から子へと繋がりながらも次第に細ってゆくこの幹と枝葉の連なりは、生長と枯渇、つまり人間の生死のサイクルを鮮やかに喚起する<sup>16</sup>。叢書の進行に合わせて家系樹に

<sup>15</sup> Notes sur la marche générale de l'œuvre, Ms. 10.345, f<sup>o</sup>s 2/1-3/2. Voir *La Fabrique des Rougon-Macquart. Edition des dossiers préparatoires*, publié par Colette Becker avec la collaboration de Véronique Lavielle, Honoré Champion, t. I, 2003, pp. 28-30.

<sup>16</sup> 1869年に準備されたゾラの手による最初の家系樹には、その後刊行される小説の主要人物が、ほぼそのままの名で合計25人記載されている。しかしこの版では一般的な家系図と同じく、アデライド・フークが一番上に位置し、そこからルーゴンとマッカールの二つの系統が下方に伸びている。『愛の一ページ』に掲載せられた図版の



も加筆・修正が重ねられ、1878年の版ではマクシム・ルーゴンの息子シャルルの葉が新たに加わって26人を数える。さらに1889年の版では、ジェルヴェーズの4人目の子供という設定で急遽追加された第17巻『獣人』の主人公ジャック・ランチエを足して27人となる<sup>17</sup>。

小説の執筆に当たり、ゾラは毎回登場人物のメモを作成したが、『パスカル博士』のそれはほとんどが、過去の作品で登場した家系樹の主要人物たちの復習となっている。パスカルに長年仕える女中のマルチヌ、クロCHILDに求婚する若い医師ラモンなど、初登場の人物も何人かはいるが、準備段階での焦点はあくまで家系樹の完成にある。ゾラは1889年の版に再び筆を入れ、一族の子供をもうけたヒロインのリストをもとに、それぞれの物語で誕生した子供たちを書き足した。草稿には、手書きの文字のみによる下書きと清書、そして決定版と3枚の家系樹が残され、それとは別に一族全員の遺伝タイプを図表も作成されている<sup>18</sup>。こうして最終的に全貌が明らかにされた家系樹には総勢32人が連なり、『パスカル博士』の物語中で死を迎えるため没年が1873年と書かれた5人を除き、致命的な遺伝病を免れた13人の生き残りが数えられる。ゾラが加筆した家系樹を注意して見ると、一族の病の発端とされるアデライドの葉の傍らには、「彼女の陰に無名の人 l'inconnu derrière elle」というゾラの書き込みがある (fig. 1)。そして物語の結末でパスカルとクロCHILDの間に誕生を予定されている子もすでに、「未知の子 l'enfant inconnu」として最後の葉に加わっており、一族は二つの« inconnu »に挟まれている。

このように『ルーゴン=マッカール叢書』とは、数千ページにものぼる膨大な草稿・資料が残され、読者が索引を必要とするほどの作品群でありながらも、ただ一枚の絵にすべてが還元可能であるという、マクロとミクロを兼ね備えた性格を特徴とする。家系樹のたった一枚の葉にも、小説一冊分に匹敵する物語が背後にあるからだ。さらにその構造は、ゴンクールがゾラの言葉として書きとめた表現、「尻尾に噛み付く蛇の輪」のように円環が完全な形で閉じるのではなく、つねに不可知の祖先と未知の次世代への謎を残している。『パスカル博士』は、小説に付随する一ページ、すなわち家系樹の絵を足す

---

ように、アデライドが大樹の根となってそこから上方に子孫の枝が伸び、世代が進むにつれ先細っていくというイメージは、徐々に具体化されたと考えられる。(Ms. N.A.Fr. 10.345, f° 130. Voir *Ibid.*, pp. 158-161.)

<sup>17</sup> 『獣人』にはエチエンヌ・ランチエが再登場するはずだったが、主人公の陰惨な行動が『ジェルミナル』(1885)のエチエンヌ像と齟齬をきたすと判断したゾラは、新たな人物ジャックを創造し家系樹に挿入した。多少の齟齬が生じようとも、家系樹の設定は柔軟に修正されていたのである。(Ms. N.A.Fr. 10.274, f° 581.)

<sup>18</sup> Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 185.

ことで初めて、完全な「全作品の要約であり結論」になると言えよう。

### 3. 研究者パスカル、創作者ゾラ

『パスカル博士』の草稿においてゾラが完成させた家系樹は、次にテキストの内部に移し変えられ、主人公パスカルの未完の研究として物語の重要な要素となる。『ルーゴン家の運命』で初登場してからつねに、パスカル博士は嫡出子の系統である家族の病や狂気、欲望が引き起こす異常な事件に立ち会ってきた。兄弟のウジェーヌとアリスティッドはいくつかの物語で主役となり、子供をもうけて家系樹の枝を伸ばすのに対し、パスカルはあくまで孤高を保っている<sup>19</sup>。彼は時として非情なほど冷静に、家族の遺伝病の症例を見届け、データを集め、記録する。第5巻『ムーレ神父のあやまち』では、特別な病の兆候を示していない甥のセルジュ・ムーレまでもが観察の対象になっている。その熱心な研究姿勢の原動力として示唆されるのは、その時点では読者にまだ公開されていない「家系樹」の存在である<sup>20</sup>。

観察と記録を怠らない科学者パスカルの造形に、おそらくゾラは第1巻から幾分の自己投影をしていたらう<sup>21</sup>。パスカルはつねに、自分が家系樹の外側の人間だという自負を持っている。そしてルーゴン家の典型である父や兄弟とは距離を保ち、遺伝病が顕在化していないセルジュなど、比較的「健全な」人物に親近感を抱く。しかしこの研究者としての中立性は、けっして積極的にドラマにかかわれず、医者でありながら家族の誰をも癒すことがないという役割上の制限を生んだ。『ルーゴン家の運命』では脇役として登場したパスカルは、主人公の年若く純真な従弟シルヴェール・ムーレの成長を見守りながらも、暴動に加わった少年の銃殺という悲劇を止められない。『ムー

<sup>19</sup> 1868年に作成された家系樹には、パスカル・ルーゴンは「完全に家族の外側にいる En dehors complètement de la famille」とのメモがある。(Ms. N.A.Fr. 10.345, f° 130.)

<sup>20</sup> 『ムーレ神父のあやまち』第1部第7章には、以下のようなパスカルの台詞がある。「パスカルはノートを取る学者ならではの鋭さで、甥を眼の端で興味深そうに観察した。[….]『お前は一族の聖人だもの、群れ全体の救済は任せたま。[….]もし家族が順繰りにやってきたら、お前はとんでもない告白を聞かされるだろうな…でも私には彼らの懺悔は必要ない、ただ遠くから見守り続けるのだ。家には植物標本や臨床ノートと一緒に、彼らについての書類もある。いつかとびきり興味を惹く一覧表が作れるよ。そう、今に分かるさ!』」(Zola, *La Faute de l'abbé Mouret*, RM, t. I, 1960, p. 1247.)

<sup>21</sup> ただし登場人物設定の中で、パスカルの項目に明白な自己投影は認められない。『制作』(1886)に登場する小説家サンドーズが「私 Moi」と書かれていたのに対し、パスカルに関して類似の記述はない。パスカルの役柄は、ほぼ叢書における作家ゾラの立場そのものだが、「パスカル=ゾラ」という理解には留保が必要である。

レ神父のあやまち』では、貞潔な神父セルジュと野生的な少女アルビーヌの助言者としてパスカルが再登場する。恋人たちはパラドゥーと呼ばれる庭園で愛を交わすが、やがて神父は厳格なカトリシズムに立ち返り、絶望したアルビーヌは咲き乱れる花に埋もれて自殺する。パスカルはここでも、少女の愛情を頑なに拒む甥を論しながらも、破局を防げない傍観者にとどまった。

『ルーゴン=マッカール叢書』の各巻には、『愛の一ページ』で主人公エレーヌと恋に落ちるドゥベルルや『生きる歓び』（1886）の理性的なカズノウエなど、数多くの医師が脇役として登場してきた。しかし主人公となるのはパスカルが初めてで、これまで病状の観察に甘んじてきた医師は、ついに治療法を探究する行動的な人物となる。小説はその仕事部屋の描写から始まる。

パスカル博士は窓の向かいの筆筒の前に立って、書いたばかりのメモを探していた。[…] 開け放たれた大きな家具は、彫り込まれた樫材造りの、どっしりと美しい金具のついた18世紀のものだったが、棚板の上も側面の奥までも、紙片、資料、原稿の膨大な山がごちゃ混ぜに積み重なり、あふれていた。走り書きのメモから遺伝に関する大がかりな研究の完成原稿まで、博士が書いたものを何でも筆筒へ放りこむようになってから、30年を越えていた<sup>22</sup>。

「開け放たれた」筆筒を満たす大量の書類が暗示するのは、読者に「要約であり結論」が開示されようとしている『ルーゴン=マッカール叢書』の総体に他ならない。パスカルの傍らで、姪クロチルドは有能な助手として草花を観察し、正確なデッサンを描いて資料を補完している<sup>23</sup>。メモ・資料・原稿・デッサンに分類可能なこれらの研究は、ゾラが叢書の準備段階で用いたメソッドそのものである。小説の冒頭から、巧妙に二重写しにされた科学者の研究と小説家の創作が、主要テーマとして提示されるのだ。

第2章でパスカルは、「直接遺伝」「間接遺伝」「隔世遺伝」「影響遺伝」「潜在性」という5つの遺伝タイプの研究成果を読み返す<sup>24</sup>。読者にはこの研究

<sup>22</sup> Zola, *Le Docteur Pascal*, p. 917.

<sup>23</sup> クロチルドの容姿にはジャンヌ・ロズロの造作が認められるとされるが、決してジャンヌだけがモデルでない。実際にゾラの膨大な草稿を管理し、必要に応じて手を貸したのはアレクサンドリーヌだった。『パスカル博士』の草稿には、妻が清書した家系樹も含まれている。反対にジャンヌに宛てた数々の書簡では、ゾラは家庭の関心事を繰り返し書き綴っているが、仕事の話にはほとんど触れていない。

<sup>24</sup> 1860年代にプロスペール・リュカの遺伝学を通じて叢書のヒントを得たゾラは、『パスカル博士』において最新の科学書や専門家の助言によって知識を補強し、遺伝についてのメモを作成した。同時代の遺伝学に対するゾラの解釈については、19世紀後半の科学的観点から『パスカル博士』における遺伝学概念を詳細に分析した金森修の論考を参照されたい。（金森修、「仮想の遺伝学」、『ゾラの可能性 ― 表

が、ゾラ自身が遺伝学の読書体験を通じて書いた、叢書のためのノートであると容易に推察される。しかし物語の内部の登場人物、特にパスカルの母フェリシテは、彼女自身は家系樹に書き込まれていないことも知らず、一族の遺伝を調査し資料を書き綴るといふ息子の仕事を嫌悪する。

ああ！ この忌々しい記録をフェリシテは夜ごとの悪夢に見た！ 死んだ先祖たちと一緒に永遠に葬り去ってしまいたい栄光の裏側、真実の歴史や家族の生理的欠陥すべてが火の文字でさらされるのだ。博士が壮大な遺伝研究を始めたころに記録を集めようとして、身内に認めた典型的な症例が発見した法則を証明することに驚き、一族を標本として研究し始めたことを、彼女は知っていた。

[...] 彼は学者らしい呑気なあけすけさで、30年前から家族の最も私的な情報まで収集し、選別と分類を重ね、ルーゴン=マッカールの家系樹を作成した。その膨大な記録こそ、証拠だらけの注釈だった。『ああ！』ルーゴン老夫人は意気込んで続けた。『私たちを汚す反故紙なんか燃やしてしまうのよ<sup>25</sup>！』

このように物語は、パスカルが決して公開しようとしないうえの未完の家系樹の存在をめぐって展開する。『ルーゴン家の運命』や『プラッサンの征服』で、「黄色いサロン」と「緑のサロン」の女主人としてルーゴン家の政治的成功に貢献し、「失墜した政体の退位した女王<sup>26</sup>」となるフェリシテは、一族の栄光に目障りなパスカルの研究が「火の文字でさらされる」と感じる<sup>27</sup>。いわば母と息子は並行して、長い歳月をかけて一種の巨大なモニュメントを築く作業に打ち込んできたのだ。またフェリシテの家系樹への本能的な嫌悪は、見方を変えれば、叢書にたびたび浴びせられた、「おぞましい」「汚らわしい」などという読者からの批判とも重なるだろう。パスカル博士を取り巻く母フェリシテ、姪クロチルド、女中マルチーナは、研究の処遇についてときに共犯となり、ときに対立する。第1章から4章までは、パスカルと3人の女の人に原稿をめぐる攻防が展開され、フェリシテに唆されたクロチルドまでが「生活を変えて悔い改め、過去の過ちすべてを燃やさなくては。そう！ あなたの本、書類、原稿を…<sup>28</sup>」と犠牲を強いる。パスカルは、執拗に隙を窺う女たちへの疑心暗鬼にとりつかれ、筆筒に研究成果を閉じ込める。

まさに叢書の「総括」と呼ぶべき第一のクライマックスは、第5章の嵐の

---

象・科学・身体』所収、藤原書店、2005年、pp. 105-131.)

<sup>25</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 1021.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 925.

<sup>27</sup> これは旧約聖書「ダニエル記」の、ベルシャ王ベルシャツアルの饗宴に突然人の指が現れ、壁に火の文字を刻んで王の治世の終わりを告げたという挿話を想起させる。

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 994.

夜に訪れる。家系樹を処分しようと仕事場に忍び込んだクロチルドに、パスカルは隠し続けてきた家系樹をさらし、家族の凄惨な歴史を語り始める。ブラッサンにとどまり続けているパスカルが、フランス中に散った一族の行く末を熟知していることはいささか矛盾しており、この章においては紛れもなく「科学者パスカル＝小説家ゾラ」である。パスカルの口を借りて、家系樹の葉に書かれたそれぞれの人物を説明することが、すなわちゾラ自身による叢書の総括なのだ<sup>29</sup>。プレイヤッド版にして実に6ページ、一度も段落を変えることなく、ゾラは圧倒的な迫力でわずか19の文章に叢書の19作を要約してみせる。パスカルは科学研究の成果を発表するというよりも、まるで叙事詩を語るように一族それぞれの運命に注釈を加える。ゾラがパスカルに、叢書を出版順ではなくて、ルーゴン側の枝葉からマッカール側の枝葉へと、家系樹の秩序に即して語り直させていることは興味深い。『パリの胃袋』（1873）や『ボヌール・デ・ダム百貨店』（1883）など、一族の人物が主人公でない作品についても、その小説の要となる家系樹の一員と外側の人間とのかわりにおいて物語が捉えなおされている。上流社会にのし上がったルーゴン系統、ブルジョワ階級のムーレ系統、労働者階級のマッカール系統の順に叢書の物語は再分類され、必然的に一族の栄光と裏面、陽と陰という対極的な流れが生まれる。パスカルは語りの後半で、『居酒屋』、『ナナ』（1880）、『ジェルミナル』（1885）、『獣人』、『大地』（1887）、『壊滅』など、マッカール系統の悲劇的な物語の要約を次々と畳みかける。こうして血や炎、病と死という、叢書を買ってきた破滅的なライトモチーフが否応なく押し寄せてくる。この語りが聞き手のクロチルドにもたらした衝撃的な効果は、叢書を一気に再読したゾラ自身の読書体験であったかもしれない。

完成間近の家系樹の紙を手にしたパスカルは、「ああ！ 私の家族よ、君たちは何になるのだろうか、どんな存在へと行き着くのだろうか！<sup>30</sup>」と嘆く。クロチルドもまた、知らぬ間に観察対象として学者の眼にさらされ、一凡例として葉の中に記述されていたことに動揺する。

「そう…それであなたは、先生？」とクロチルドは言葉を継いだ。するとパス

---

<sup>29</sup> アンリ・ミットランによれば、『パスカル博士』は叢書全体を組み込む「入れ子式の物語」である。「興味深い変化によって以前の作品は、そこから登場人物と状況を引き出す外科手術の対象となり、すべてを要約する入れ子式の物語の中に再び挿入される。」(Préface d'Henri Mitterrand pour *Le Docteur Pascal*, Gallimard, coll. « Folio classique », 1993, p. 44.)

<sup>30</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 1018.

カルは何の迷いもなく叫んだ。「おや、私かい？ 私の話が何になる？ 私は一族の者ではない！ […] 母もしょっちゅう言ったよ、お前は違う、どこから来たのか分からないと！ […] 町で私がパスカル・ルーゴンと呼ばれたことがあったかい？ いいや！ いつも単にパスカル先生だ。だって私は例外だから… 褒められた話ではないが、実際背負うには重過ぎる遺伝もあるだけに、それが嬉しい。もちろん私は一族皆を愛しているが、自分はまったく別物で、何の共通点もないと思うと心が弾むよ。ああ、私は一員ではない、違うのだ！<sup>31</sup>」

科学者パスカルと研究対象クロチルドの関係を、小説家と登場人物のそれに仮託するならば、パスカルの返答は「自然主義作家は物語に加わらない」という、ゾラと作品の距離感を表しているかのようである。しかしかにかにパスカルがゾラの代弁者を務めようとも、彼は紛れもなく家系樹の一員であり、フィクションの駒のひとつとなることを免れ得ない。19の文章は、20作目の『パスカル博士』を欠いた数である。パスカルが自分を例外と考へて安堵を味わうその瞬間も、彼の物語は刻々と家系樹の葉に書き込まれていく<sup>32</sup>。

第5章を境にパスカル博士は、研究成果を盗まれるという強迫観念から心神耗弱に陥る。家系樹の外側にいたはずの自分も遺伝の宿命の内にあると知ったパスカルは動揺し、「お前か…？ ああ私たちの老いた母よ、狂気を与えたのはお前か<sup>33</sup>？」と、アデライドから始まる家系樹のすべての葉の遺伝系統を糾弾する。一族の観察者の眼差しは、最後に自らの身体の内側に向けられるのだ。第7章で得たクロチルドの愛が一時的にパスカルの健康を蘇らせ、遺伝学から注意をそらすものの、彼はやはり観察と記述という研究作業に立ち返る。第12章でパスカルはクロチルドの妊娠を知るが、同時に心臓発作の兆候を感じ、自らの死亡時刻を正確に予告する。パスカルは究極の自己観察として、症例の自己診断と家系樹の補完をしなければならない。

パスカルは指の間で転がる鉛筆に気づいてそれを握り、眼が霞んで見えないうように家系樹の上に身をかがめた。そして最後に見直すように一族をたどった。 […] クロチルドの名にはっとし、そのメモを完成するために書いた。「A、1874年、伯父パスカルとの子供。息子。」しかし彼は疲れ果て、錯乱しながらも自分の名を探した。やっと見つけると、手を握り直し、大きく整った文字で「心

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 1021.

<sup>32</sup> ミシェル・セールは、読者が全知の語り手に従属するという、ゾラの小説では一般的な構造が、「自然主義小説」である『パスカル博士』においては覆されていると指摘する。「読者すなわち観察者を含めた観察対象全体、作者までが対象として自然主義化される。」(Michel Serres, *Feux et signaux de brume*. Zola, Grasset, 1975, p. 21.)

<sup>33</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 1035.

臓病で死亡、1873年11月7日」と書き上げた。その最後の努力で喘ぎがひどくなり、息が詰まりかけたとき、クロチルドの上の空白の葉が見えた。[...] 痛めつけられた愛情と、衰えた心臓の苦しい乱れがよぎる弱々しい字で、彼はなお書き足した。「未知の子供、1874年生まれ。どんな子になるだろう？」<sup>34</sup>

パスカルは自らも含めて5人の葉に没年を1893年と書き込み、運動失調症の甥マクシム・ルーゴンについては、存命中にもかかわらず年内の死亡を断定する。ゾラが書いた現実の家系樹と、パスカル博士が仕上げた架空の家系樹の内容は、12章のこの時点で完全に一致する。しかし力尽きる前に、なお空白の葉にこだわってメモを書こうとするパスカルの姿は、科学者としての厳密さを貫いたというよりも、今度こそ一族に健全な命が育つようにという父としての願いを、まだ見ぬ我が子へ託しているようである。『ルーゴン=マッカーナル叢書』の生成過程で、主役世代が交代するにつれ物語が増殖して20作にまで至ったように、家系樹の完成は必ずしも「完結」を意味しない。新しい生命への期待を抱きつつ、一族の観察者としてのゾラの分身は、小説の結末を待たずに息を引き取るのである。

#### 4. 破壊の炎と浄化の炎

第5章と第12章における家系樹の描写から明らかなように、「素朴な作品」であるはずの『パスカル博士』のテキストは、一枚の家系樹を媒介に過去の19作と最終巻、そして物語の内と外とが複雑に入り組んでいる。その基本には「尻尾に噛み付く蛇」のように、クローディー・ベルナルが指摘する「サイクル」の構造がある<sup>35</sup>。「全作品の総括と要約」としての『パスカル博士』においては、パスカルが記入する資料としての家系樹だけではなく、登場人物そのものの生死によっても、家系樹の完成というプロセスが同時進行で描かれる。第1巻『ルーゴン家の運命』から登場し、最終巻でなお生存しているルーゴン家の数名には、1871年と93年の小説世界を結ぶ象徴的な死が与えられる。第一のサイクルを成すのは、第9章で起こる、家系樹の末端にいる、マクシムの虚弱な息子シャルルと、根元にいる105歳のアデライドの相次ぐ死である。遺伝病による二人の死は、『ルーゴン家の運命』、『居酒屋』、

<sup>34</sup> *Ibid.*, pp. 1181-1182.

<sup>35</sup> Cf. Claudie Bernard, « Cercle familial et cycle romanesque dans *Le Docteur Pascal* », in *Les Cahiers Naturalistes*, n° 67, Société littéraire des Amis d'Emile Zola et Éditions Grasset-Fasquelle, 1993, pp. 123-140.

『ナナ』、『獣人』など、主人公の悲惨な死で結ばれる作品のこだまと言える。第二のサイクルには、同じく第 9 章で死亡するパスカルの叔父アントワヌ・マッカールの自然発火と、第 13 章の博士の遺稿の炎上が指摘できる。叢書には『ブラッサンの征服』、『大地』、『壊滅』など火事の場面がドラマの終局となる作品があるが、いずれも一種の身内殺しを象徴する火である。この炎による破局もまた『パスカル博士』で反復され、一種の叢書の要約となる。

しかし第 1 章からフェリシテは、パスカルの研究を「燃やしてしまうのよ」と明言している。第 3 章で再登場するアルコール中毒のマッカール叔父に対しては、「いつかパイプに火をつけたとたん、パンチが燃えるように自分を燃やさないか心配だ<sup>36</sup>」という冗談まじりのパスカルの忠告がある。またクロチルドの甥シャルルに関しては、「些細なことで出血し、特に体内の血が涸れつくすほどひどい鼻血を出す<sup>37</sup>」という説明が、本人の登場前に与えられている。人物の会話の中には血や炎の前兆が頻出し、先で起こり得る破局は伏線とも言えないほどはっきりと予告されている。『パスカル博士』におけるこうした予測可能な破局は、過去の作品でオブセッションのようにルーゴン＝マッカール一族を襲ってきた数々の死の情景を、再び読者に喚起する。

たとえば第 1 巻『ルーゴン家の運命』最終章では、パスカルの祖母アデライドが突然発狂する場面があった。孫のシルヴェールが、反乱に加担して憲兵に射殺されたことを悟ったための錯乱である。ゾラは 1871 年の時点ですでに、アデライドの狂気の描写に自らが構想した家系樹のイメージをはっきりと重ね合わせ、一族の観察者パスカルに叢書の行く末を幻視させている。

「ああ、憲兵だ！」ディッド叔母はあえいだ。[...] パスカルは射るような眼差しを狂女、父、叔父に向けた。学者のエゴイズムが先立ち、変態中の昆虫に出くわした自然科学者のように母と息子たちを観察した。そしてパスカルは一家の勃興に思いを馳せた。一本の樹の根から何本もの枝が張り、その苦い樹液は光と影の環境によって様々にねじれながら先へと伸びた分枝にまで、同じ胚種を運んでいる。彼は雷光が閃くように、ルーゴン＝マッカール家の未来、解き放たれ飽食した食欲な一群を、金貨と血の燃える輝きの中に垣間見た気がした<sup>38</sup>。

「一本の樹の根」はむろんアデライドを指し、「苦い樹液」は病んだ血液を、「先へと伸びた分枝」とは、物語の時点では登場していないシャルル、さら

<sup>36</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 970.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 972.

<sup>38</sup> Zola, *La Fortune des Rougon*, RM, t. I, p. 301.



にはパスカルの子の世代を示すのであろう。第1巻で暗示されたこの叢書全体の展望は、22年の時を経た最終巻で矛盾なく回収される。ゾラは『パスカル博士』で、5世代離れたシャルルとの邂逅の場面において、アデライドの狂乱を反復させる。シャルルは隔世遺伝によって、アデライドの風貌と虚弱体質とを受け継いだという設定の少年である。彼は精神病院に入院した高祖母の眼前で遊んでいる最中に、突然鼻血が止まらなくなり、そのまま失血死してしまう。痴呆状態のアデライドは、まるで見殺しにするかのように、遺伝病の「胚種」がもたらしたシャルルの死を静かに見届ける。

ディッド叔母は背筋を伸ばし、立ち上がりかけた。凝固しかけた赤い血だまりに横たわる、蒼白で穏やかな死んだ子供を見つめる瞳には、22年の長きに渡る眠りの果てにある思念が灯った。この末期的な錯乱の病巣、回復の見込めない脳も、おそらく完全な闇には閉ざされておらず、残された遠い記憶が恐ろしい衝撃のせいで突然目覚めたのだ。忘れられた女は生き返り、虚無を脱け出し、恐怖と苦しみの幽霊のように痛ましく佇んだ。彼女はしばしばあえいだ。そして震えながらただひと言呟いた。「憲兵だ！ 憲兵だ<sup>39</sup>！」

アデライドの記憶の中で、シャルルの痛ましい死とシルヴェールの死が結びついたことで、1851年と73年という物語の時間は共鳴する。まるで病んだ家系が自家中毒を起こしたかのように、始祖と末裔がほぼ同時に死に至るこの場面にも、第1巻と同じく観察者としてパスカルが立ち会っている。

『パスカル博士』における、こうした自己破壊的な「身内殺し」のテーマは、いわば末期状態に達した家系樹の自浄作用と捉えられる。『ルーゴン家の運命』と『ブラッサンの征服』で暗躍した、アデライドの私生児アントワーヌ・マッカールの自然発火による死もまた、その変奏である。長年の飲酒でアルコールが染みわたったマッカール叔父の身体は、自然発火によって「小さな青い炎<sup>40</sup>」を上げ、眠っている間に焼き尽くされる。

叔父はどうなった？ どこに行った？ 椅子の前の床石は淀んだ脂肪で汚れ、わずかな灰だけが残り、その隣にパイプが残っていた。黒いパイプは、落ちたのに壊れてもいなかった。叔父のすべてがこの一握りの細かい灰の中に、そして開け放った窓からすり抜けた赤茶けた雲や、台所を覆っていた煤の層の中にあった。おぞましい溶けた脂は飛び去り、すべてを押し包み、どれに触っても

<sup>39</sup> *Le Docteur Pascal*, pp. 1104-1105.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 1092.

脂でべたつき、ひどい臭いを放っていた<sup>41</sup>。

アデライドの負の遺伝を負った、家系樹の太い枝のひとりであるマッカールの身体はこのように無化される<sup>42</sup>。しかし実際はフェリシテがその死の直前に、泥酔したマッカールのパイプの火が膝に落ち、くすぶりはじめたのを偶然目撃していた。彼を起こさずに踵を返し、炎上するままにした彼女の行為は、故意の黙殺による身内殺しにも等しい。一族の恥部を隠蔽するためには身内の死をも厭わないフェリシテにとって、火は破壊ではなく浄化をもたらすのである。同じ理由から第13章では、一族の疾患を記録したパスカルの研究が、その死後に実母の手で火に投じられ、叔父と同じく灰燼に帰す。

しかし扉の敷居で、クロチルドは無残な光景のすべてを理解した。開け放たれた筆筒は完全に空っぽで、マルチヌは炎に怯えて狂気に駆られ、祖母のフェリシテは歓喜に輝き、爪先で記録の最後の断片を炎の中に押しやっていた。煙と舞い上がる煤が仕事部屋に充満し、火事のような轟きは人殺しの喘ぎを思わせた。この崩壊の乱舞を彼女は眠りの奥底で聞いたのだ。[…]「泥棒！ 人殺し！」すぐに彼女は暖炉へと駆け出した。そして凄まじい音ではざる炎や舞い散る火の粉まじりの煤にもひるまず、髪が焦げ、手を火傷する危険も顧みず、燃え残った紙片をつかみ、胸に抱いて勇敢に火を消した。だがそれはあまりにわずかな残骸で、一ページとて完全ではなく、壮大な研究、一生を賭した粘り強い膨大な著作の一片ですらなかった。二時間かけて炎が焼き尽くしたのだ<sup>43</sup>。

マッカールの死とパスカルの研究の炎上の間には、フェリシテの介在によって照応関係が築かれる。これは世俗的な栄光のモニュメントのために行われた知的なモニュメントの焼却、一種の息子殺しである<sup>44</sup>。さらに筆筒の中の

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 1096.

<sup>42</sup> バンシュールは、マッカールの自然発火の描写を、アルコールを契機とした火に対する夢想という無意識の「コンプレックス」の産物と定義し、自然主義理論からの思わぬ逸脱と評した。ゾラ自身は1893年7月20日のファン＝サンテン＝ゴルフ宛ての書簡の中で、人体の自然発火現象を信じていないと書いている。「最後には炎によるフィナーレという秘めた欲求が明らかになり、ゾラはすべての火刑、本質的な火刑への訴えに耳を貸す。[…]内部から生体を焼き尽くし得る強烈な炎の靈感が最も内奥の無意識に宿ることを、これ以上はつきり認められようか？」(Gaston Bachelard, *La psychanalyse du feu*, Gallimard, coll. « Folio essais », 1985, pp. 164-165.)

<sup>43</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 1021.

<sup>44</sup> 「ゾラはパスカルを殺すだけでは飽き足らず、その仕事が犠牲となる場面を描く。[…]フェリシテがその治世のモニュメントの土台をより堅固にするため書類を燃やすように、ゾラも手書きのモニュメントを燃やす。彼はその筆筒の中身、つまり下書きや過去、実験小説家としての負債を清算する。」(Bernard, *op. cit.*, p. 131.)

科学研究が、ゾラの「出産」による作品と重なり合うと考えるならば、パスカル＝ゾラはいわば我が子を殺されたにも等しい。あたかもゾラ自身が、小説家にとって自殺行為のような原稿の焼却も厭わずに、22年かけて築いたモニュメントである叢書の草稿を一掃し、自らの創作メソッドを完全に否定したかのようだ。クロチルドがかき集めた焼け残りの断片も、パスカル博士の後輩であるラモン医師から見れば、とうてい完成原稿と呼べるものではなかった。ところが彼女は、机の上に一枚無防備に残された家系樹に気づく。

この一連の場面は、ゾラにとって「叢書の草稿」と「物語を創作する行為」が持つ意味を解き明かしてはいないだろうか。パスカルとクロチルドが頑として筆筭に研究成果を閉じ込めても、フェリシテは力づくでこじ開け、すべてを燃やした。しかし、第12章でパスカルが死の間際に家系樹を完成させた場面を再び思い起こそう。瀕死のパスカルが、母への警戒心すら捨てて筆筭から家系樹を取り出し、「書き残す」行為に身を委ねたからこそ、それだけは「聖遺物<sup>45</sup>」として無傷で机上に残ったのである。死を目前にしたパスカルは、研究者として長年推敲してきた科学理論の証明をもちや顧みず、むしろ自らもその一員である一族の物語の続きとして、個人的な祈りを空白の葉に書き入れていた。過去の作品の再読は苦痛だというゾラの言葉を想起するならば、「完成作品」は破壊の衝動を免れ得ないとしても、未知のものに希望を抱き、書き続けようとする行為そのものは肯定されている。パスカルの築いたモニュメント、つまり世間に公表すべき完成原稿は灰となるが、研究価値がないと判断された家系樹は、胎内に宿ったパスカルの「未知の子」と共に、私物としてクロチルドの手元に残る。まるで炎を免れた小説中の家系樹が、『パスカル博士』の刊行時に挿入された一ページであるかのように、第13章は物語の内と外の結節点となる。

## 5. 新生のモニュメント

ここまでたどってきたように、『パスカル博士』第13章までの出来事の多くは、「決定版のプラン」において謳われた、自己放棄や生への信頼という叢書の要約とはまるで異なる部分が多い。しかし各章で起こる悲劇の合間には、パスカルとクロチルドとの間に、人類の病とその救済について問答が繰り返されている。科学と宗教を交互に語り合うこの師弟の対話にこそ、「科学と計り知れない力」の二つの軸をもつ、1890年代のゾラが到達した独自の思想が

<sup>45</sup> *Le Docteur Pascal*, p. 1203.

表れている。人類の救済についての考察が、登場人物の対話や独白を通してめぐらされることは、決して叢書において初めてではない。ゾラは第 11 巻『ボヌール・デ・ダム百貨店』で、デパートの従業員ドゥニーズを通して「万人の幸福」に関する思想を語らせ、第 12 巻『生きる歓び』（1884）では、ポーリーヌを通して「自己放棄」による幸福の可能性を問いかけていた。『パスカル博士』での叔父と姪の会話は、これらの過去作品で提起された問題意識がさらに発展したものである。

「歴史的・科学的・哲学的」に書かれたとされる『パスカル博士』は、実際にはゾラの作品としては例外的に、聖書への意図的な言及が多い。パスカルの研究には遺伝学のほかに、病人に皮下注射するための羊の脳髄を精製したエキス「万能薬<sup>46</sup>」の開発というもうひとつのテーマがある。ゆえにブラッサンの村人からは「救い主、待望のメシア<sup>47</sup>」のように遇されていた。そしてパスカル博士が、遺伝学や皮下注射の効能についてめぐらす科学的考察には、医学用語がちりばめられているものの、実際はひとつの観念論である。たとえば隔世遺伝の研究において、パスカルは「創世記」におけるアダムの創造と先祖返りを結びつけている。家系樹の病巣の起源を求めるその思考は、ディッド叔母のさらに祖先、人類の始祖へと遡ろうとする。

彼らは家系樹の最後の分枝で、太い枝の力に満ちた樹液もそこまでは巡らない。幹に巣くった蛆虫は、今では果実にもぐりこみ食い破った…でも決して悲観することはない、一族は永遠の変転の内にあるのだ。家族は共通の先祖を越えて、生存した一族の計り知れぬ起源を貫き、原初の間まで伸びている。そしてとこしえに成長し、広がり、未来の世代の先まで無限に枝分かれするだろう…<sup>48</sup>。

原初と未来の両極への拡がりを含む「永遠の変転」という表現は、ゾラの世界観の根底にある、人間の生死のサイクルへの関心を示す。そもそも叢書の各巻では、受胎の困難や虚弱な子供の誕生が再三描かれてきた。パスカルの遺伝学への興味も、妊娠の研究に発端があると説明されている。旧約聖書もまた、アブラハムからイスラエルの一族が繁栄していく血脈の物語である。『パスカル博士』においてルーゴン=マッカーール族は、聖書のエッセイの家系樹の変種であるかのように諧謔的に描かれる。たとえばシャルルとマッカーールの死は、退廃した王族の最期として表現される。シャルルは「豪華

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 949.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 956.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 1017.

な金髪を広げた頭を血の海に横たえ、蒼ざめた幼い王太子のように神々しく美しい<sup>49</sup>」まま死ぬのであり、マッカールは「酔いどれの帝王として自らを炎に包み、己の肉体を火刑台にして焼き滅ぼし、王らしく死んだ<sup>50</sup>」のだ。

パスカルとクロチルドの、近親相姦的な関係でありながら、大らかに理想化された愛にも、聖書の挿話が重ねられている。「絵に描かれるような、穏やかで威厳のある老いを知らない古代の王<sup>51</sup>」の風格を備えたパスカルと、彼にかしづくクロチルドの組み合わせは、「創世記」のアブラハムとサラ、「ルツ記」のボアズとルツ、そして特に「列王記」冒頭の老いたダビデ王とシュネム人の乙女アビシヤグとの関係になぞらえられる。10章では肌を露わにしたクロチルドが、「彼に与えた豪華な饗宴を終えると、自らの肉体を王にふさわしい贈り物として捧げた<sup>52</sup>」とある。「豪華な饗宴」という言葉は、本論冒頭で引用したジャンヌへの献辞と呼応する。私的な体験であるドゥニーズとジャックの誕生を仄めかすように、この場面でクロチルドはパスカルの子を身ごもる。しかし家系樹最後の子供は、たとえゾラ自身の子がモデルであるにせよ、遥かに宗教的な象徴性を与えられる。パスカル博士は死の間際、前日にクロチルドの妊娠を知ったばかりなのに、予言的に家系樹に「息子」と書き込んだ。ダビデ王から伸びるエッサイの家系樹から14代を経てイエスが生まれるように、名もない子供には「おそらくは贖い主<sup>53</sup>」という期待がかけられる。「自然主義」作品では極力避けられてきた、このような聖書への暗示は、最終巻におけるゾラの小説観の大きな変化を示している。

『パスカル博士』の第14章は、科学研究の炎上から一年後の8月の昼下がりに、クロチルドと赤子がパスカルの仕事部屋で過ごす場面で締めくくられる。かつてパスカルの草稿がぎっしり詰まっていた筆筒は、子供の下着類をおさめる衣装戸棚となっている。子供はいわば、パスカルとクロチルドによる「作品 l'œuvre」であるため、未来に貢献する作品を保存するという筆筒の役割は保たれていることになる。赤子へ授乳するわずかな時間の間に、クロチルドの脳裏をよぎるさまざまな想念こそは、『ルーゴン=マッカール叢書』の真の「哲学的な」結論となる。ここではクロチルドが、パスカルの科学思想と自らの宗教観を融合した思想を、ゾラの代弁者として独白している。

---

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 1104.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. 1097.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 954.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 1128.

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 1218.

今ではクロチルドは、自分の二重性はすべて、正確な模写を求めて時には何時間も一輪の花の前にとどまる真実への情熱と、時には現実を抜け出し、架空の花が咲き乱れる楽園を憑かれたように夢見る彼方への欲求にあると考えていた。いつも彼女はこんな風で、絶え間なく自らを変えていく新たな生命の波の下にあって、結局は今なお昨日のままの彼女であることを感じていた<sup>54</sup>。

クロチルドの「二重性」は、その健全さと科学に対する旺盛な知識欲においては『生きる歓び』のポーリーヌを、未知や神秘に憧れる傾向としては『夢』（1888）のアンジェリクを思わせる<sup>55</sup>。つまりは、叢書自体に一貫して流れる科学性と神秘性という両極端な志向、ゾラ自身が最終巻においてもなお解消し得なかった二重性である。しかしどちらか一方の傾向を選択するのではなく、両者を受け入れた上でその融合を目指すことに、書くことによる「生の肯定」が可能となる。パスカルが家系樹の葉に書いた、「どんな子になるだろう<sup>56</sup>？」という問いかけを、クロチルドは我が子を抱いて反復し、「この混乱した時代では、預言者を待たねばならない。それは反キリスト、荒廃をもたらす悪魔、広がりすぎた不純な大地の浄化を命じられた獣かもしれない<sup>57</sup>」という「黙示録」を思わせる独白をする。あたかもゾラ自身が聖書をたどり直し、叢書から繋がる新しい物語の執筆を志しているかのようだ。事実ゾラは1899年から、最後の連作『四福音書』に取りかかっている。

遠くで再び金管楽器のファンファーレが響き渡った。このフィナーレは、祖母フェリシテが、銀の鎧で、ルーゴン家の栄光のために建立される記念碑の礎石を置いた瞬間に違いなかった。広大な青空は日曜日の華やぎで歓びに満ち、祝祭と化していた。そして暖かい穏やかさ、仕事場の静寂の安らぎの中で、クロチルドは子供に微笑みかけた。赤子は乳を飲み続け、まるで生命に呼びかける旗のように、まっすぐにその小さい腕を天に向かって突き上げていた<sup>58</sup>。

『パスカル博士』は、二つの対照的なモニュメントの完成で結ばれる。フェ

<sup>54</sup> *Ibid.*, pp. 1208-1209.

<sup>55</sup> 特に『生きる歓び』と『パスカル博士』の間には、中心となるテーマから登場人物の類型・配置に至るまで、多くの共通点が見出される。ポーリーヌとクロチルドの造形の比較については、拙論「ゾラの『生きる歓び』における家庭の苦悩 — 永遠の海と不毛の日々」（『仏語仏文学研究』、第33号、東京大学仏語仏文学研究室、2006年9月、pp. 99-121）を参照されたい。

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 1218.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 1219.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 1220.

リシテは「喝采される女王<sup>59</sup>」として心安らかに、「ルーゴン養老院」の礎となる最初の石を置く。クロチルドは、完成した家系樹の最後の葉である赤子をあやしている。一方パスカルが最後に記した言葉が、「どんな子になるだろう？」と疑問符で終わっていたことはきわめて示唆的である。観察と実験の記録として始めたはずの『ルーゴン=マッカール叢書』が、数限りない資料と下書きに基づく20作の物語を積み上げてなお、未知の部分を残して閉じられることを、作家が肯定していることになるからだ。

草稿や書簡を通じて繰り返し、作品創造を「出産」になぞらえてきたゾラにとって、精神から生まれる作品と肉体から生まれる子供の間、明確な境界はない。しかしゾラは両者を同一視し、執筆行為と子供の誕生が相互に代替可能なものと結論しているのではない。家系樹の最後の「白い葉」は、書くことへの欲求を呼び覚ます「白い紙」と、未知の可能性を秘めた子供を表すことで、二重の価値を帯びるのだ。『パスカル博士』完結後も、名もない赤子をはじめ生き延びた一族の13人には、おそらく語り残された物語が続く。そして5章でその存在に言及されながら家系樹に書き込まれず、名前も明かされないポーリーヌ・クニユの血の繋がらない養子、オクターヴ・ムーレやエチエンヌ・ランチエ、ジャン・マッカールの子供たちも、書かれなかった物語の主人公候補である。ゾラにとって家系樹が枝葉を広げること、彼らについて小説家が書き得る物語が無限に増殖することだと言えよう。創作につきまとう「産みの苦しみ」にもかかわらず、ゾラは新しい物語を書く可能性を積極的に肯定し、生の凱歌を上げる赤子を描いて叢書を閉じる。

## 結論

ゾラは『パスカル博士』において、20年以上に渡る創作の過程、科学への関心を出発点に具体化し発展してきた思想、そして二重の私生活という要素を交互に組み込みながら、自身が「作品創造」について抱いていた哲学を語りつくした。『ルーゴン=マッカール叢書』の執筆とは、いわばフェリシテのように土台となる最初の石を置くことを皮切りに、たゆみなくモニュメントを築きあげ、ひとつの作品が終わればまた一から次を始める作業であった。そして最期の瞬間まで観察の対象を記録し、後世に遺贈しようというパスカルの強い意思は、ゾラの文学的営為を支えた原動力そのものである。

作品を産み出すことへの疲労、叢書から解放される喜びを再三表明しなが

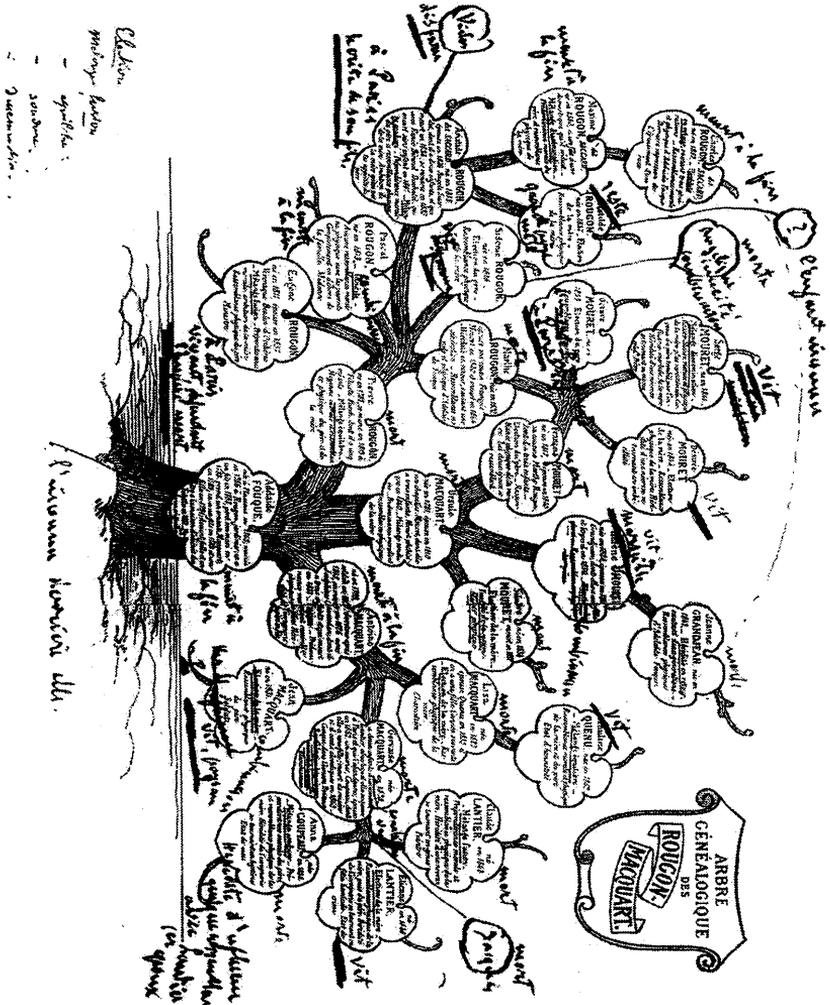
<sup>59</sup> *Ibid.*, p. 1206.

らもなお、ゾラは最後まで「物語を繋ぐ」連作を志向する小説家であり続けた。叢書完結から時を置かずして、ルルドへの巡礼から始まってローマ、パリへと至る『三都市叢書』（1894-98）、そして『パスカル博士』で表明した思想を発展させた『四福音書』（1899-1903）が後に続く。しかし叢書の中で形成されてきた、病理の発見から症状の記述、そして治療法の探求と克服へと向かう表現意識の変化により、ゾラのメソッドは物語の構築というよりも、想像力と思想的な表現が混在した、「語るように書く」文体へと導かれて行く。『パスカル博士』最終章のクロチルドのモノローグには、「人類は前進する *l'humanité en marche*<sup>60</sup>」という言葉が見られる。晩年のゾラは、ドレフュス事件に際して発表した論説集『真実は前進する *La vérité en marche*』（1901）のように、個人的な祈りを込めた「前進」というメッセージを同時代に向けて繰り返し発するようになる。ゾラはモニュメントのごとく築き上げた作品そのものではなく、その完成のために筆を進め、前進する創造的行為をこそ肯定する。ゾラの小説に対する観念は変遷したが、『四福音書』の最終巻『正義』が1902年の不慮の死によって未完に終わるまで、1868年当時の「ただ小説家でありたい」という創作上の信念は、作家人生を通じて揺るがなかったのである。

---

<sup>60</sup> *Ibid.*, p. 1212.





(fig. 1). « L'arbre généalogique des Rougon-Macquart »

【図版出典】

Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 172, voir Olivier Lumbroso, *L'Invention des lieux, Les Manuscrits et les dessins de Zola*, t. III, Les Éditions Textuel, 2002, p. 535.